
ある バイト

今日源石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある バイト

【Nコード】

N5545V

【作者名】

今日源石

【あらすじ】

暑い夏には、冷たい噂が流れる。

‘あの事件——不幸ビルに行った学生が帰ってこない——’
そんな噂が流れていた七月某日。だんだん深刻化し青木参治あおきさんじの学校の生徒も夏休み前に急に減っている。夏休みに入った青木と友達の前に、
‘あの事件’が現実になる。

プロローグ

暗闇のこの部屋に明かりが漏れた。

「誰だ。名乗れ」

「執行部よ。雇い主さん」

女の声だ。

「入れ」

足音が響く。椅子に座る音。溜息。

「おやおや、お疲れかい？」

違う男の声。

「うるさいわね。命かかってんのは、お前も一緒だ。こちらは、お客だ」

「そうですよ。先生。落ち着いて、落ち着いて」

違う男は先生のような。

少しの沈黙。声を上げたのは、雇い主だ。

「先生、お嬢ちゃん。あなたたちは、六組目です。前の組は、ここごとく失敗。惜しい人もいましたが、ミッション成功には程遠いわれらも、そろそろ動かないと」

「あなた達の事は、知らないわよ」

「こら。静かに」

「さすが先生、では話をしよう。今から五日後には夏休みとやらでしょう？そのときには、精鋭陣をください」

不敵な笑みを浮かべるのを感じる。

「それは、私がやるわよ。それより、あんた達に私たちをまかなえるのかが心配ね」

「そのことについては、心配なく。なぜなら、私たちは、人知を超えています。あしからず」

息をのむ声が聞こえる。誰がやったか分からない。

「部屋をでようか」

先生と女が席を立つ。ドアに向かう。

「先生、私この七日間欠課でいいです。その代わり口裏を合わせ
てね」

「まあ、安心しろ。延期二日が無理なら延ばしてもいい」

「了解」

ドアを開く。

女の声が出る。

「明暗を分ける。死ぬ気で行こう」

呟いたみたいだ。

雇い主の笑い声が静かに部屋に残る。

手に汗握るとはこのことか。発車したらもう、とまらない。終着
点までの道のり長し。

夏休みの始まり

七月某日。

「みなさん、やっと待ちに待った夏休みですね・・・」

話の長い校長先生の話がようやく終わろうとしていた。外では、ザアザア雨が弱まりつつあった。生徒の数が少ない。立ちながら寝ていた青木参治あおきさんじは、携帯のマナーモードの振動で起きた。正確には、そろそろ終わると直感して半分寝て半分起きている状態だった。そこにメールが来たのだった。誰だろう、と思いながら携帯に目を向けた。送信者、しろいサン。

「えっ、しろいサン？なんで」

口にしてしまった。慌てて周りに注意を向ける。大丈夫そうなのでメールを見た。

「校長先生またあの事言ってなあ どう思う？」

面倒くさいので「知りません！」と打って、返信した。

しろいという人物に送ったメールが5秒後に体育館に響いた。彼は、マナーモードをしないことが多く、今きつと後悔していると青木は思った。

「こらー、白井」

怒られている白井は、「すいませえーん」と言っ、笑い誤魔化した。

「まあまあ先生、落ち着いて、白井鴉君しろいからすはわざとじゃないんだから。でも、白井君も気を付けないとね」

校長先生はゆっくり言った。ただ、白井という名字がこの学校に少し多いという理由だけで、いちいち下の名前まで言わなくてもいいとみんな思っていた。

校長先生は、最後に

「まあ、あの事件’のこと皆知っていると思いますが、わが高校まで来ているらしいので」

と言って壇上を降りた。
もつとよくまとめられないのか、青木はそう思った。

終業式が終わり、宿題を渡されそのまま下校した。

「ねえねえ、からちゃん。面白かったね。はははは」

「だからその言い方するな。俺は白井鴉だ。分かったか！」

「ええ。なんでよ。いいじゃない、フミには良いっていったじゃん」

白井は、そろそろ堪忍袋が切れるところだった。青木が、

「まあまあ、二ノマエさん、白井さん」

「なによ。あんただって二ノマエさんって、他人行儀みたいに言いやがって。わたしは、^{にのまえがみか}一二三香だ。自己紹介の時にフミと呼んでていったじゃんバカー」

暑い日だった、特に蒸し暑かったので、すぐ収まった。そして、しょうもない応酬に飽きてきた頃、あの事件についての話題が上がった。

「そう言えば、あの事件、はさ、んん？なんだっけ。」

「バカねえ。からちゃん。それは、人が謎のビ——」

「その話はするな。うんざりなんだ。」

急に話しかけられて、三人とも、戸惑った。そりゃそうだ。真昼にこんなにも大きな声で、話されたら驚くに決まってる。一段落ついたところで、声のほうへ体を向けると、

「え？だれ？」

「しろいサン、何言ってるんですか！この人は、^{しろいサン}河野さんですよ」

「あー。なるほどね。フミ知ってるよ。この人生徒会副会長だ。そうだよ？こうみッチ。うん、絶対そうだ」

「はいはい。分かった分かった。合ってるよ。二ノマエ——じゃなくってフ・フミさん。」

河野は戸惑いながら、相槌した。

「僕も思い出した。この人は、^{いづみ}河野光弥さんだ。しろいサン。今日

終業式の司会していた人ですよ」

「へえ。じゃあ、この人が早めたらもつと早く終わったのに。今頃寝ているのにな」

「白井さん、ですか。あなたが、怒られなかったらもつと早く終わったと思いますが」

少しの間、皆から笑い顔が見えた。

「そうだよな。こうみツチ。」二三香が、青木たちのほうを向いて「お前ら、しっかりフミっていえよ。こうみツチは、しっかり言ってるぞ。特に、参治。まあ、からちゃんは、いいや」

青木は気付いた。二三香は、自分を高めたいのか。自分というものにこだわり過ぎていると。白井は気付いた。二三香は、青垣にはあだ名をつけないことを。河野は疑問に思った。この三人は、なんでこんなに仲がいいのか。どうして笑いあえるのかと。少量の雨がそれぞれの傘にあたる音が妙に響く。

二三香が口を開く。

「こうみツチの友達一号は、この二三香である。だよな？」

「まあ、はい。それより、あの事件のことは口外禁止！以上」

青木が、終わりそうな雰囲気口をはさむ。

「まあ、それは分かりましたが、会長さんは何処におられるのですか。資料の提出をしないといけないのですが」

「会長は、今日は欠席です。それは私から渡します。全く、あの人は司会したくないからって」

「ありがとうございます。では」

青木が言う。

「ばいばい。こうみツチ」

あの事件

河野と別れてから、雨は止んでいた。

白井が難しい顔をしていた。二三香が気付いて顔をのぞく。

「ねえねえ、からちゃん。どうした」

「いや、参治が渡した物は何だろうと思って」

「ああ、それはですね」

青木が言おうとして戸惑う。頷きをしてOKの意味を示してから、
「『あの事件』のことです。ほら、僕って一応、陸上部兼新聞部ですから。まあ、そう言っても陸上部は僕一人ですし、新聞部は顧問がいないので幽霊部ですよ」

意外と驚かれて青木が驚いた。開いた口がふさがらない、とはよく言ったもんだ、と思う。

「でも、新聞部のほうは、生徒会が校長先生と連携して運営してくれて僕が情報収集役です」

「初耳だな。参治」

「僕は、しろいサンと違ってサッカー部兼バスケット部兼バレー部という事は出来ません。あなたは、運動神経を買われてこの学校来たんじゃないんですか？」

「違うよ、参治。からちゃんは、勉強部も入っているよ。まあ、実質的には補習よね」

「そうですね。それで、殆ど部活出てないですもんね」

「おい。お前ら、殴るぞ。参治は頭が良いからって。フミも少し運動ができるからって」

白井の顔が赤かった。まるで、獣だ。このまま、放っておくとやばいから話題を切り替えようとした二人だったが、焦っているほど思考が回らないものだと感じた。

「まあまあ、しろいサン。運動神経いいなら自慢できるじゃないですか。中学の時の全国大会のこと、覚えていますか。サッカーする

か、バレーするか迷って結局交代するタイミングを調整して二つとも出た、っていう話です」

「へえ、からちゃんにそんな武勇伝あるなんて。中学も同じがよかったな」

「覚えているよ。死にそうだったんだから」

「では、話を戻しますがいいですか」

すっかり白井の話で全く聞く耳を持つていなかった。少ししてから、青木が河野のことを思い出した。よくあのタイミングで、話題を自分に向けれるものだ。

「はい！静かにしてもらえますか！話を聞くのはあなた達だけだ！」大きな声が響く。

「わっ、分かったよ。落ち着け、怒るなあ。参治、俺らも悪かったって」

必死に白井と二三香が止めに入る。

ぬるい風が吹いた。

青木から、殺気が消える。

一段落つき、三人で歩道を歩いていた。熱風が、頬を触る。

「すいません」

「大丈夫だ。俺らが悪かったからな。それよりも、おれは、あの事件’を知りてえ」

「私も、謎のビルに人がいくくらいしか知らないし」

青木は、二人の顔を覗く。

「うん。あるチラシを配られたひとが、なぜか、三丁目ビルに行つて帰ってこない。偶然に行方不明だった生徒が、三丁目ビルの前で見つかるが、記憶がチラシをもらった時までしかない。そして、これが面白いんですが、ビルに行くのは学生だけです。ある学校の生徒がいつきに減るっていうニュースを聞いたことがあるでしょ。現に僕らの学校の生徒も減っています。だから、三丁目ビルは、不幸ビルと呼ばれている。もともと、あの場所には、建つ予定がなかつ

たらしいし。土地神を怒らした、っていう噂までたっています。‘あの事件’の総称を‘不幸ビル行方不明事件’という事になります。ただ不可解なことは、行った学生皆が必ず帰ってきます。そして、これは、あまり公にすることにはうちの校長が伏せると。五日前、情報収集をしていて、電話で報告したら、そう言っていました。

あと、チラシが見つからないんです。どういう経緯でビルに行くのか、分らないんです。内容さえ分かれば新聞に書けます。

これが、僕の調べたことです」

熱風を感じない。緊迫した状況。怖いぐらいだ。青木が笑っている。

白井が、逃げるような視線を泳がせた。そして、

「あつ、家に着いたぞ」

「じゃあ、私はこれで。二人とも五階だね。私は、今日塾があるの」

「おう。じゃあな」

二三香は、一階に向かって走った。

「青木、白井、フミは、同じマンションに住んでいるのか。じゃあ、次は、あんたたちにしよう。」

ええっと、あと二日か。延ばしたら先生の言い訳が、口下手で、意味不明になるな。特に生徒に聞かれたらヤバイ。そうしたら、うちまで、疑われる。明日の朝この人たちに・・・」

夏風が冷たく吹く。

青木と白井は五階に向かう階段にいた。

青木は‘502号室’。白井は‘501号室’。

今日は、そのまま寝ることにした白井。今日のうちに新聞の記事を少しまとめようとする青木。夏休み初日は、なんとなく終わっていく。

不幸ビルへの誘い

朝、五時。青木はいつもと同じ時間に起きる。体を温めるためのジョギングをするためだ。そして、青木は準備を済ましてから、水を一杯飲んだ。

「さて、しろいサンを起こしに行こう」

これも日課になっていた。

青木が「501号室」へ向かう。インターホンを押す。一分後に白井は姿を現した。

「早かったですね。しろいサン」

「昨日早く寝たせいで、今日はすっきりさ」

「では向かいましょうか」

五時五分。日差しがまだ弱いのが、目で確認できた。

青木が早足で階段へ向かう。それを追うようにして白井が後から走っていく。

ジョギングの道のりはいつも同じだった。裏口から隣町の駅までの一直線、その次に学校に向かって走り、家まで戻っていく、というルートだった。

五時三十五分。いつもより少し早いペースにしたからか、白井が起きるのが早かったからか、その理由は考えても無駄だと思った。

昨日見た帰り道。違うのは二三香がいないことだった。それにもう一つは、その二三香が苦い顔をして、帰ってくる二人の前にいたことだった。

二三香が怖い顔をして話しかける。

「ねえ、二人ともこんなにも朝早く走っているの？」

視線が明らかに他のほうに向いていることが分かった。

二三香の手には、くしゃくしゃの紙が強く握られていた。

青木が口を開けた。

「フミさん。何か隠し事をしているでしょう？僕らもなぜあなたが

朝早く起きているのかが分かりません」

気圧されたように二三香が半歩下がった。ゆっくり震えた唇を動かす。

「朝早く起きたのは、夏休み始まったから無駄にしたくないなあ、と思ったの。それだけで早起きした。しかも四時四十七分にね。何か悪い？」

白井が身を乗り出したように、話を聞いている。二三香は、ただ不機嫌にしか見えない。話を続ける。

「少し待ってベランダのほうにいたら、あなた達が走っていた。それで、二人みたいに走ってみようかな、と思ったの。あなた達の事はよく耳にするから。それでも本当だったとはね。そしたら郵便受けにこれが入っていたの。ついでを言うと二人とも入っていたわよ。見てなかったの？」

青木が笑って話す。

「それはですね、いつもルートで行くと裏口から出るので見ないんですよ。そんな朝早く郵便も届かないし」

二三香が、そうだよな、といった顔をして少し安心した顔をする。白井が口を挿む。

「でも俺らがそれを昨日見ていない。ということは、朝早く誰かが入れたものに違いない。うん」

自慢げに推理したように見せた。

青木が少し笑って息を深く吸い込む。

「フミさん。その紙見せてください」

二三香は、戸惑うことなくスツと手を出した。

そこには、こう記されていた。

急募

MKSからの招待状 for 二三香様
三丁目のビルへ来てください

五日 ある、バイトをして欲しいです 内容は秘密です

お金は一括で払います 仕事ぶりにもよりますが、平均は大体、百万円程度です

必ず保証します

男女問わず

ただしこの事は口外禁止

支配人 幸治 こうじ 刃 じん

P・S・興味がありましたらお電話ください
詳しい説明をします

この内容を読んで最初の感想はなかなか親近感の湧く内容ではない。文体は柔らかい。

電話番号に関しては、小さく下のほうに書いてあった。

青木、白井の顔に緊張が走る。もっとも、二人の見解は違った。

青木は、記事がまとめられると思ったから。白井は、自分にも来ていることを思い出したから。

青木が口を開こうとした時に、二三香が口を挿む形となって一瞬静けさが戻る。

先に話したのは二三香だった。話すというよりかは、尋ねるように。「これどう思う?」

今から言おうとしたことを質問され、青木は戸惑った。そこに白井が口を入れる。

「百万だってさ、百万。すごいなあ、俺も貰えるってことだよな。やったー」

青木が白井の会話を制して話す。

「この広告は間違いなく不幸ビルについて書かれています。平均百万貰えるってことは、それ以上稼げるかも、と思い応募する人。怪しいので電話をかけてしまう人。そして絶対帰ってこれるから行く

人。そんな人たちが不幸ビルの被害者だったというわけだ。それにこれの最も厄介なところは、本人たちは自分の意志で行っているの
で、何も止める口実がない」

二三香が頷きながら言葉を返す。

「そうなのよね。まず話が抽象的すぎて行こうとしたら電話しない
といけない。そこでまんまとはまってしまふ。また、不幸ビルの噂
も立っているけれどどうして行きたがるのかが、分かった気がする
わ」

白井が話から離されそうになる。慌てて口を挿む。

「それでさ、行くの？行かないの？結構お得だと思わないのか。お
前ら」

「しろいサン。それだと僕たちもあのビルに行って出れなくなるし、
出てこれても意識もない状態になりますよ。それが嫌なら行く必要
はないです。まったく、あなたみたいな人がこの罠に引つかかるん
ですね」

「わ、悪かったな」

慌てて言葉を返す。

日が昇ってきて温かくなってきたるはずが全く別の環境を作ってし
まった。この幸治刃って奴を懲らしめたいと三人の共通の思いにな
った。

青木が提案する。

「しろいサン、フミさん。どうしますか？」

二人とも少し考えたい、という事だった。

午前中は三人まとまって、夏休みの宿題をすることにした。場所
は白井の部屋という事になった。

「二人とも入るのは初めてだよね？」

白井の問いに青木が、

「確かに隣だったからか気にしたことがなかったですね」

続いて二三香が、

「フミ、男の子の家に入るのは初めて」

と言って軽く興奮していた。

朝の起きたことのせい、宿題のペースも遅かった。青木にとってはこの宿題に関しては、三十分もあれば一日分のノルマの三分の一もかからない。しかし、今日は同じ時間を過ごしてもノルマの七分の一度だった。白井に関しては、青木に解き方を教わりそのあと答えを教えてもらっていた。青木としては答えを知っているほうが教えやすい、という事だそう。二三香に関しては、うるさく話しかけていて宿題には手を付けてもいなかった。後で青木に教えてもらうつもりだ。

一時間半も経ってしまったら、この宿題は気を紛らわすにはあまり効果を示さなかった。それどころか宿題をする雰囲気ではなかった。青木が頑張って二人に宿題をしろと言っても手をつけなかった。結局青木も一日分にノルマを終わってからは二人と混ざって遊んでいた。そのまま、買い物しようという事にまなった。

各自家に帰って——部屋に戻って——昼ご飯を食べてから行くことにした。

青木は、自分の家で三日分のノルマの宿題を終わらせた。そうしている、あつという間に約束の時間が来た。集合場所である、一階の二三香の家の前に早めに行った。

買い物に行くから、白井はお気に入りのジーンズをはいていた。

二三香は、普通に何処にでもいそうな女の子という感じだった。

買い物に行くとは言ったものの、結局コンビニに行くことになった。

二三香は、実用品やらを買い込んでいた。白井は適当に涼んで本を読んでいた。青木は、メロンパンとジュースを買った。白井が、

「またそれか。好きだなあ」

いつも買っているから、青木の好物がメロンパンだと白井、二三香にばれていた。

それから、青木、白井も忘れていた、チラシを取って再び白井の
家に行く。

このチラシの事実を確認するために。

電話

チラシに書かれていることは、名前以外丸々一緒だった。あとは、貰える金額も少しばかり変わっていた。百万円のところは、二百万円になっていた。男はやはり働けるからなのか。そんな疑問を持ちつつ、白井の家の前に着いた。

部屋に入るや否や白井はゆっくりソファに寝転んだ。緊張感のない顔で、ジューズをコップに入れた。その時にのみ、起き上がりまた寝ころんだ。

二三香は、緊張していつ、電話のことを言おうか迷っていた。

白井がテレビの電源を入れた。テレビでは、最近起こった議員のヘリ機の事故を取り扱っていた。

——まあ、この場合仕方ないですよ。ヘリ機の事故は生存確率一割以下ですから。落ちなかつたら強いですが——
解説者が言うことに少し反応したように青木が苛立ちを露わにしていた。

「このやろう、生存確率のせいにしやがってむかつく」

二三香が顔を覗きこむように話す。

「で、でもさ参治。やっぱり死は怖いからよ。言ってることは正しいわ。それに生存確率一と十は違う」

「そういえば、このヘリ機の事故のおかげで、俺らのビルの件伏されているらしい」

白井が二人の話に気づき口を挿む。

「しろいサン。そんな話してる時じゃないですよ」

「ごめんごめん」

早まる鼓動が聞こえそうになるまで、白井の部屋は落ち着いていた。

急に青木が、

「電話かけませんか。この詳しくは、電話してくれて書いてあ

るし」

もう、そうするしかない和白井、二三香は思った。

電話番号を二三香が押して、青木に預けた。青木は指が震えて、押せなかった。度胸あるなと白井は思い出させられた。

やると決めたらやるしかない。そう反復し続け青木は受話器を耳に当てる。

プルルル、プルルル。ベルが二回なる。

もう一度鳴った。苛立ちを足踏みで止める。そうしたら、プチツ、と音がした。切られたのか、そう思い少し安心した。

すると、またプルルル、プルルル。音が鳴った。青木の顔に緊張が走る。そのせいで、白井、二三香にも緊張が走る。
力チ。

そうして、ゆっくりとした息を受話器からはつきり聞いた。

それに応じて青木がスピーカーホンにする。

「お電話ありがとうございます。こちら、MKSです。このたび我々の招待に対し、お電話していただいてうれしい限りです。あなたのお名前を伺ってもよろしいでしょうか」

その男の声がそこでいったん話が止まる。話せという事だろう。

「僕は、青木参治。他には、白井鴉、一二三香だ。以上」

「ありがとうございます。こちらの方とも一致しているので、参加を認めます。いかがなさいますか」

また静かになった。白井が大きな声で怒鳴りつけた。

「おい。何なんだよ、お前ら。参加しなくていいのか、ならしい。人がいなくなるんだぞ。帰ってくるけど。白井鴉は参加しないぞ」

「フミはどうしようかな。ねえ、そこに参加すれば、帰ってこない人を帰すことができるのかしら」

相手側の声が聞こえた。

「それは、あなた達次第です」

「ならフミは参加します。一二三香は参加します」

それを聞いた白井が困ったように言った。

「フミ、それだとお前帰ってこれなくなるぞ」

「でも帰ってこれるんでしょ？」

相手側が口を挿む。

「もちろん、それを保証します。体までは」

静かになる。夏の暑さが部屋に少し留まった。

「参治、どうすんの？俺はお前も行くなら俺も行くよ」

「なら、決定だ。全員参加だ」

青木がはつきり声を出す。

「ありがとうございます。では、今夜の十二時に三丁目のビルに
来てください」

プツッ。ツーツー。

青木は受話器をおろすのにかなり時間がかかった。

三人とも心音がやむどころか早くなるのを感じた。

不幸ビル。もう目の前まで近づいている。背中を無理やり押され
た感じがしたが、あとは踏み出すしかないと思った。

不幸ビルに

夜まで、待つことにするがその間の緊張が彼らの雰囲気を作っていた。その形がぐったりするというよりそわそわしている、が相應しい。

青木は、どこかに行く準備をしていた。白井は漫画を読んでいたが、ところどころに緊張の色をにじみだして、トイレに行ったり、筋トレをしていた。二三香は、部屋の間を行ったり来たりを繰り返していた。

不意に、青木が大きな声で言い放った。

「寝ましよう。二人とも。夜に集合なら、くらくらしでまともにアルバイト出来ないなら、招待状貰っておいて申し訳ないようにならないと」

白井が二秒ほど経ってか、首肯しながら声を出した。

「そうしようぜ」

二三香は、何も言わず頷いているだけだった。

三人とも眠りについた。現実から逃げるに相應しいものは睡眠だと三人ともに共通の思いだった。

ただ青木は、寝ている心地はしなかった。今日という日に何かあったのかを、忘れられないとしみじみ感じた。

白井は、わくわくしている体を振舞っていたからか、本人でもわからないほど、ゆっくり寝た。

二三香は、長いような短いような眠りで、ただ安心して寝た。二人が守ってくれると思って。

青木、白井、二三香は、大体八時まで寝ていた。

青木が飛び上がるように起きて、驚くような声を出した。

「もう八時ですか？」

「そうだね」

二三香が、頷いている。

白井が体を起こして、腕を大きく回した。そして、

「よし、準備運動終わり」

そのあとに、特に会話は続かなかった。眠りたいせいもあった。

午後九時二十分頃、適当に空いている店に入って、晩ご飯を買って、家に帰って食べた。青木はメロンパン、白井は惣菜弁当、二三香は栄養ドリンクだけを買った。

そして、三丁目に建つビル——通称、不幸ビル——に向かったの準備を済ました。

三人は出発した。自分たちで出した答えを相手がどう返すかに少しの期待と、これから起こることに対しての恐怖と、きっと不幸ビルの正体を暴き、生きて帰って来ること且つ記憶も持って帰って来る決意を胸に歩き出した。

到着した時、不幸ビルは大きな風に吹かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5545v/>

ある バイト

2011年10月21日02時10分発行